

ジョン・バーニンガムの魅力 1

『ガンピーさんのふなあそび』

『なみにきをつけて、シャーリー』

を中心に

高原 典子



子どもに、「今まで読んでもらった絵本の中で好きなものを選ぶとしたら、どれ？」と聞きましたら、中一のむすめは、「絵本で、まず絵が良くないと…『はらべこあおむし』と『バーニンガムのちいさいえほん』、オルズバークの『西風号の遭難』かな。」といい、五年生のむすこは、「まず『じごくのそうべえ』でしょ。それから『ガンピーさん』、『チムとゆうかなんせんちようさん』と答えました。そばで聞いていた父親は、とても満足そうにうなずきました。バーニンガムの絵本は父親自身が気に入って、クリスマスに、誕生日にと子どもた

ちに贈り、毎晩のように誘い合っては、ガンピーさんと犬のシンプ、ねずみのトラブロフなどの世界に遊んでいたからです。

私も時々その輪の中に入れてもらいましたが、子どものように読んでもらうことのなんとんのん気で楽しかったこと！心ゆくまで絵本の絵にひたることができました。なかでも『ガンピーさん』のシリーズには、読んでもらう度に、悲しい気持ちまで吹き飛ばしてくれるようなおおらかで温かな力を感じました。

今回は、その『ガンピーさんのふなあそび』と『なみにきをつけて、シャリー』を中心に、バーニングガムの魅力を探っていきたいと思います。

○緑色の画面

『ガンピーさんのふなあそび』は、絵が先に、文章が後につけられただけあって、最初の場面で、主人公のガンピーさんの多くを語るのは絵の方です。いかにも人の善さそうな丸い顔、長ぐつをはき、大きなじょうろを持

つ園芸家、もしくは農夫らしい風貌。次の場面では、ガンピーさんが舟を持っていること、家が川のそばにあることがわかります。

この絵本では、どの場面にもやわらかな緑色の草木がたくさん描かれています。とくにこの場面では、家も庭も川も舟も深い緑色に埋めつくされています。これはガンピーさんの生活が樹々と草原に囲まれた田園の中にあること、生活そのものも自然に根ざしたものであることを感じさせます。色彩心理学では、「緑色の中には現実的満足がある。黄と青が完全に平衡してそのどちらでもない単純な緑となるとき、感覚と感情はこの上に安らぎを見出す。それ以上に欲するなものもない。」と捉えられますので、緑色におおわれた画面は、ガンピーさんの安定した世界を象徴し、読み手にも深々としたやすらぎを与えるわけです。そしてこの緑色の洗礼を受けてはじめて、ガンピーさんの世界に入ることができるのでしょう。

○左右画面のコントラスト

ある日、ガンピーさんは舟に乗って出かけます。すると男の子と女の子がやって来て、「一緒に連れてって」というのです。ガンピーさんは「いいとも、けんかさえしなけりゃね。」といって、二人を乗せます。舟は進み、次々に新しい仲間が現れます。これはロシアの昔話、「てぶくろ」や「おおきなかぶ」、日本の「ももたろう」などで登場人物が増えていく手法と同じです。

新しい仲間のうさぎ、ねこ、犬、ぶた、ひつじ、にわとり、牛、やぎなどは次々にスポットライトを浴び、彩色されて右ページに大きく登場しますが、彼らが舟に乗ったとたんにページは繰られ、舟も進むのです。そして文章としては表現されない舟の中のようなすが左のページに、セピア色のペン画で示され、右ページの鮮やかさとは画風も異にして、あたかも光と影のように交互に描き分けられていきます。そのコントラストによって、新しい仲間の登場が強調され、見開きの画面は、左右それぞれが独立しており、左右では空間も時間もまったく違

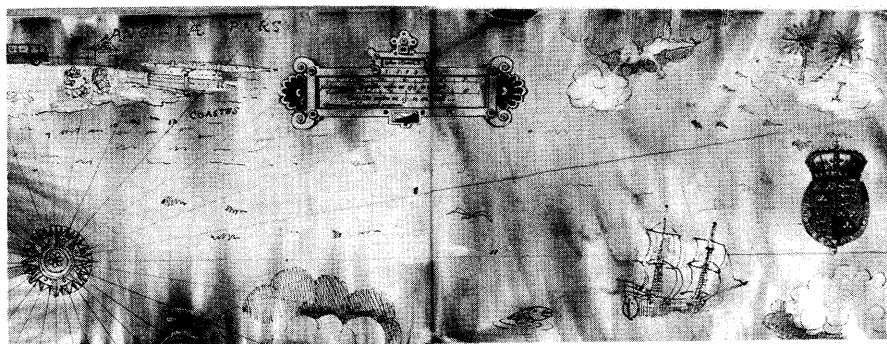
うことを明確に描き出すのです。

バーニングムは『なみにきをつけて、シャリー』でも、この手法を用いていますが、こちらでは、又、コントラストの意味が違ってきます。

シャリーは両親と海辺へ出かけますが、まだ水が冷たくて泳げません。そこで両親は砂浜にデッキチェアを広げ、シャリーは岸辺に立つて海を眺めます。以後、両親の現実的行動は左ページに、シャリーの空想は右ページに描かれていきます。左ページで両親は思い思いに新聞を読んだり、編物をし、おかあさんはシャリーに「くつをよごしちゃだめよ」とか「石を投げちゃだめ」などと母親らしい注意のことばを投げかけます。そのことばがページを繰るタイミングを作ると同時に、シャリーが現実的にはどんな行動をしているかを示すのです。

シャリーは外から見れば岸辺から海を見たり、海草を拾ったりという様子を示しながら、それらの行動を理由づけるまったく違う現実のまったく中にいるのです。

つまり空想の世界では、犬と一緒にボートで海へ出ていくと海賊船に捕らえられそうになるが、勇敢に闘って地図を奪いとり、宝物を見つけて帰ってくるという大冒険をしているのです。外的現実における午後の数時間も、シャーリーの内的現実では、とっぷりと日が暮れるまではるかに長い時間にあたります。こうして左のページと右のページのコントラストが、おとなの時間と子どもの時間、外的現実と内的現実をみごとに描き出すのです。もちろん力強く鮮やかな画風で描かれているのは、シャーリーの空想の世界の方です。バーニングが現実と空想をどんな風に捉えているかは、見返し（図版1）を見るとよくわかります。現実には左上の岸辺にわずかな位置を占め、空想はその先の七つの海へと広がっています。位相的には現実さえもおおってしまうほどです。時空を超えていくのです。でも空想の基盤となるのは海につれてきてくれた両親のいる陸地であり、帰っていくことのできる岸辺がなければ、空想は始まりもしない、そう物語っているようです。



▲図版1 『なみにきをつけて、シャーリー』（ほるぷ出版）より

こうして、バーニングムは『ガンピーさんのふなあそび』と『なみにきをつけて、シャーリー』で、左右ページの画風をそれぞれ違い、時間や空間、あるいは現実と空想のコントラストを描くことによって、まさに絵で読み、絵で楽しむ絵本を生み出したのです。

○登場人物の視線

『ガンピーさんのふなあそび』の楽しさの大きな要素となっているのは、セピア一色の画面にあり、どちらかというと色鮮やかな右ページよりも左ページの方が饒舌のような気がします。

最初、ガンピーさん一人だった舟の上は、ページを追うごとに仲間が増えていき、舟の上は狭くなるはずなのに、皆、のびやかに思い思いに舟遊びを楽しむのです。ときどき川に手を入れたり、のんびりと足をのばしてみたり。でも舟がどんな位置にあっても、必ず舟の上のどれかは正面、つまり読み手の方を向いていますので、画面の中から手をふられたりすると、思わず手をふって応

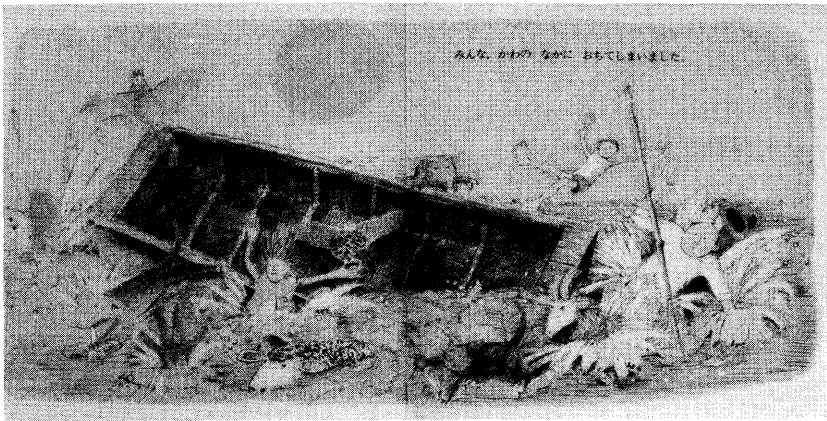
えたくなるような親しさを感じます。なかでもガンピーさんはほとんどの画面で人なつこそうな丸い顔を読み手の方に向けていますので、思わず「私も乗せて!」と声をかけたくなります。

松居直は『絵本とは何か』のなかで、ディック・ブルーナの『子どもがはじめてであう絵本』が親しみやすいひとつの要素として、「うさこちゃんが正面をきちんと向いていること」を挙げていますが、『ガンピーさんのふなあそび』の場合にも似たことがいえると思います。ファースト・ブックといわれるジャンルの絵本、たとえば『松谷みよ子あかちゃんの本』や『こぐまちゃんえほん』などでは、この画法がフルに活用されていますし、幼い読者を対象とする絵本ほど、登場人物が正面を向いている場面が多いのです。

逆に、ストーリーが複雑で、主人公や登場人物の内面を描く絵本、たとえばアーディゾーニの『チムとゆうかんなせんちょうさん』のシリーズやリンドグリーン文・ヴィークランド絵の『赤い目のドラゴン』などでは、ほ

とんど正面の画法は用いられず、後ろ姿も多くなり、読み手と登場人物の視線が合うことはあまりありません。でも、ストーリーの理解できる読み手ならば、登場人物の視線に合わせて絵本の奥深くをのぞきこむ形になり、我を忘れて主人公に同一化してしまうでしょう。そして感受性が強いほど、ストーリーから受けとるメッセージにも深いものがあると考えられます。

でも『ガンピーさんのふなあそび』は、むずかしいメッセージの託された絵本ではありません。むしろ絵を読むことのできる人ならだれでも、快い感覚にひたれる絵本でしょう。左右どちらかの画面で必ず、登場人物と読み手とが視線を交わせるような画法が用いられていることは、絵によってストーリーを読みとっていく幼い読者にとって、どれほど心強いことでしょうか。絵本の中と外でさえ、だれかと見つめ合えることは、うれしいものです。まして好きな登場人物となら、なおさらです。



▲図版2 『ガンピーさんのふなあそび』（ほるぷ出版）より

○ガンピーさんの母性的側面

さて、ガンピーさんが最後にやぎを乗せてしばらくすると、舟はふくらみすぎた風船が割れるようにひっくり返り、みんな川の中に落ちてしまいます。(図版2)どんなに楽しくても舟の上でじっとしていることに耐えられなくなったみんなが、ガンピーさんに注意されたことも忘れ、暴れたりけんかを始めたりしたからです。

でも、このとき、ガンピーさんは怒りもしなければ小言をいいもしませんでした。みんなでお陽さまに当たって服を乾かし、野原を横切ってガンピーさんの家までお茶を飲みに行くのです。この一連の場面には、ちょうど画面中に描かれている太陽の光のように、ひとときわ温かいガンピーさんの心が感じられます。

ユング派の分析心理学者、河合隼雄が『こころの天気図』の中で、『あしながおじさん』を例に挙げて、男性の中にも母性的な側面のあることについて論じていますが、このガンピーさんにも豊かな母性を感じられます。



▶ 図版3 『ガンピーさんのふなあそび』より

女性本来の大地的な母性とはひと味ちがい、水のように流動的な性質のもの、それはガンピーさんが水の上に舟を浮かべ、最たる流動性の持ち主である「子ども」を受け容れて、舵をとっていく姿(図版3)に象徴されているような気がします。舟はひっくり返るけれど、また新しい事態にも柔軟に応えていくのです。子どもの野性的なエネルギーの発露である「遊び」に充分に対応できるのは、多分に、ガンピーさんのように流動的な母性なのかもしれません。エッツの『もりのなか』で男の子を迎えにいくおとうさんも、リンドグレーンの『ロッタちゃん』のひっこし』で家出した小さなロッタちゃんの気持ちを上手に受け容れ、おかあさんとの仲をとりなすおとうさんも、この流動的な母性的側面の持ち主なのではないでしょうか。

ガンピーさんは、いうまでもなくバーニンガムその人です。ヒッチコックが自作の映画に出演したように、バーニンガムもガンピーさんの帽子を脱いで登場するのです。それは作者のいたずら心のなせる技かもしれません

んが、それだけガンピーさんに託した思いが強かったといえるのではないのでしょうか。バーニンガムはかつてスラム街を明るくする仕事などもしてきて、「子どもを喜ばせる以外、自分には未来に確固たる野心はない。」という信条で絵本づくりにのぞんでいます。そうした「子ども」への深い愛情(まさにガンピーさんに投影された母性的側面!)が、この絵本の隅々にまで満ちていて、読者を豊かに活性化してくれるのです。それが、処女作『ボルカ』に次いでケイト・グリーナウェイ賞を獲得したのも当然なことといえましょう。

掲出図書

- ジョン・バーニンガムさく／みつよしなつや訳
『ガンピーさんのふなあそび』(ほるぶ出版)
- 『ガンピーさんのドライブ』(ほるぶ出版)
- ジョン・バーニンガムさく／へんみまさなお訳
『なみにきをつけて、シャーリー』(ほるぶ出版)
- ジョン・バーニンガムさく／谷川俊太郎やく

『バーニングガムのちいさいえほん』全八冊（富山房）

＊

○エリック・カール作／もりひさし訳

『はらぺこあおむし』（偕成社）

○C・Vオールズバーグ絵と文／村上春樹やく

『西風号の遭難』（河出書房新社）

○田島征彦さく／桂米朝・上方落語・地獄八景より

『じごくのそうべえ』（童心社）

○エドワード・アーディゾーニ作／瀬田貞二やく

『チムとゆうかなんせんちようさん』（福音館）

○ディック・ブルーナ作・画／石井桃子やく

『子どもがはじめてであう絵本』全十二冊（福音館）

○松谷みよ子ぶん／瀬川康男ほか絵

『松谷みよ子あかちゃんの本』全四冊（童心社）

○森比左志・和田義臣ぶん／若山憲え

『しぐまちゃんえほん』全十五冊（こぐま社）

○リンドグレン文／ヴィークランド絵／ヤンソン由美

子やく

『赤い目のドラゴン』（岩波書店）

○マリー・ホール・エッツ作・画／間崎ルリ子訳

『もりのなか』（福音館）

○リンドグレン作／山室静訳

『ロッタちゃんのひっこし』（偕成社）

引用文献

○金子隆芳著『色彩心理学』（岩波新書）

○松居直著『絵本とは何か』（日本エディタースクール出版部）

○河合隼雄著『こころの天気図』（毎日新聞社）

（小田原女子短期大学）